

学習形態 新型コロナウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

『証巻』について

○これまで教・行・信と総論的に述べてきましたが、今回は「証」に入りたいと思います。

レジメにも書きましたように、仏教徒としての歩みは教行証という行程であることは周知のとおりであります。これまでテーマであった『教行信証』とは何か。—その撰述の意図—という事ですが、この章にきてようやくテーマに近づいてまいります。

題号にも『・・・教行証文類』と述べてあるのは「これ（浄土真宗）はまさしく教行証を持つ仏教である」という表明であったと了解できるわけです。それまでであった、あるいは今でも〔念仏すれば救われる〕という神祇的祈願と同じような信仰形態に対して、明確な仏道としての形態を明らかにされている、と考えられます。

それでは、その仏道としての形態とは何かといえ、大乘菩薩道の十地の歩みと同一である、という事をもって証明されているのでありましょう。（直接的には二回向で示されていますが、それは仏道としては明確ではない）

レジメに乗せたように、第4回の学習会で行と証の関係において

「第一に「行」とは何か。通仏教でいわれる修行的概念と同等なのであろうか。同等であるならば、行とは、「教」が示す内容を実践していき「証」を得るという行程パターンを意味してくる。

それならば、文頭に「真実行を顕わさば」と述べるべきであろう。にも拘わらず、先に戻って「往相回向を案ずる」と述べてくるのは、どういう意味になるのであろう。」という発題から『行巻』を述べてきました。そして『証巻』には「還相回向」が述べられてくる。ここから見ると、この「教行信証」というのは通仏教の教行証という修行の行程とみるよりも、往相から還相への転回と考えた方が的確ではないかと考えられます。しかし、勿論仏道である以上「教行証」という事を無視するわけにはいかないのです。

しかし、『教巻』の文頭には「浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり」とあります。最初は「浄土真宗は仏道なのだろうか？」という疑問を抱いてしまいましたが、「この二種の回向こそが仏道である」といいたいのではないでしょうか。

今回は、この「往相から還相への転回」という事を基本としながら考えていきたいと思っています。

課題17 『証巻』は結論（終着点）か？

○さて、「浄土真宗は往相と還相の回向である」というわけですが、この「往相回向」に仏

道の基本形態である「教行証」がある、という事で述べられてきたわけです。そして「教行」と「証」の間に「信」といれて、『信巻』の後半で述べられてくる「真仏弟子」によって仏道を歩む者として『証巻』に展開しているのではないかと思います。

ここで「証（さとり）」という原語を見ておきたいと思います。それはレジメに述べておりますのでご覧になってください。

「証」を原語的に遡れば、仏教の基本形態である「覚り・正覚」である。しかし初転法輪の話にもあるように、釈迦が「俺は覚った」といっても覚りを知らないものにとってはわからないわけです。それが仏教の歩みの中から「覚証」が求められるようになってくる。

しかれば、それがどこで明らかになるのか。やがて「覚」とは自覚・覚他であるという考えとともに大乘菩薩道が発展してくる。そういう流れとともに、「覚」とは「如実知見」という認識論へと移行していく。（これは虚妄分別・無分別智等の課題となっていく）

仏教の漢訳において、「証」と訳されている原語は多少の意味の相違があってもかなりの数になっているといわれている。

その原語の意味を探ってみれば、①「目の前に正しく置く・よく観察する・明らかにする」→如実知見 ②「到着する」③「到達する・完成する」などの意味の原語が「証」と漢訳されている。

○さて、『証巻』に入っていきたいと思います。文頭において「真実証を顕さば・・・無上涅槃の極果なり」と抑えられています。「極果」という限り、一つの結論と見て取れる。しかし、「しかるに」からの展開は、「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」と私たちのことを述べられており、その私たちの展開が述べられています。そしてその結びは、如来の示現で結ばれています。

ここでもう一度『行巻』に戻りますと、この『行巻』で「歡喜地」が述べられていますね。今、この「歡喜地」と『証巻』の「無常涅槃」と「如来の示現」のキーワードを拾い上げると『十地経』が浮かんでくる。したがって、『教行信証』は『十地経』を下絵にし、照らし合わせて考えられてきたのであろう、というのが今回の課題であります。

○まず、レジメの『十地経』の資料をご覧ください。〔資料を読む〕

さて、『教行信証』と「十地」を重ねてみると、

『行巻』・・・初地〔歡喜地〕

『信巻』・・・

『証巻』・・・七地 無上涅槃という到達点。覚りに沈む。

・・・「二つに還相回向というは、すなわちこれ利他教化地の益なり」とあります。この時の「地」とは八地の事でしょう。これは実に「し

かれば弥陀如来は・・・種々の身を示し現したもうなり」(p 280)
という如来の授記によって八地に進むことができるわけです。

ここでもう一度「大乘菩薩道」の思想に帰ってみますと、初地から七地までの菩薩を「未証浄心の菩薩」八地已上の菩薩を「浄心の菩薩」と言い、菩薩を二段階に分けている (p 285)

そして、最初に天親菩薩は「五念門」を「入門」と「出門」の二門で表現し、曇鸞大師は「往相」と「還相」の二相で表現されてきます。これは上記の八地を境に振り分けられる菩薩の姿に重なってくるのであります。

『真仏土巻』・・・八地 如来授記の内容。

『化身土(上下)巻』・・・九地・十地 これは八地已上の菩薩の形相を示しているのではないか。

このようにしてみると、『教行信証』というのは大乘菩薩道を示しているのではないか。そして、浄土真宗というのはまさに大乘菩薩道であり大乘仏教の至極であることを示そうとしているのでありましょう。(ただし、真宗は一地一地進むのではなく、一気に飛び越えるという仏法不思議が述べられる p 287)

したがって、『証巻』が終着点ではない、ここから新しい展開に歩みはじめるのであります。

課題18 「正定聚」とは

ここで『証巻』が終着点ではないという事を見てきましたが、それでは『証巻』とは何か、と言え、『正信偈』に書かれているように (p 204) 「大涅槃を証する」ことだった。それはどういうことかと言え、 「正定聚の数に入る」ことである。大涅槃に入るのではなく大涅槃に必ず至る保証が『証巻』の意味であるといわれているのですね。

ですから私たちの身はどこにあるかといえ、 「正定聚の数」の中に居るという事です。それならば「正定聚」とは何か、という事を明確にしなければならないわけです。ここで「数」というのは一人ではなく何人もいるという事です。その一員になるということですね。そして正定聚というのは成就文 (p 281) にあるように「ことごとく同じく一類にして、形異状なし」という事でありまた「自然虚無の身、無極の体」という事でしょう。これは、言ってしまうと「言葉では言えない」という事でしょうか。それではどこで見分けるかと言え、邪定聚・不定聚ではない、という事でしかないわけです。それが故に『化身土』によって『信巻』の正定聚の機が明らかになってくるのでしょう。

そして『信巻』で示されてきた正定聚の機(人)の姿は、『証巻』においては「浄土の命を捨てて三界雑生の生まるといへども、無上菩提の種子は朽ちず」(p 282) という事なのでしょう。この「浄土の命を捨てて」という事が重要な意味を持つてくるわけです。

課題19 『証巻』(還相回向)の意味とその着眼ポイント

さて還相に入っていきたいと思います。先に述べたように「利他教化地」と出てくる「地」は明らかに「八地」を示しています。これまでは丁寧すぎるような表現であったのが、ここにきて雰囲気が変わるように思いませんか？私は違和感を感じてなりません。親鸞聖人の感情が表現されているような・・・。ただ、気になるところは、これまで願文をきちんと述べられているのに、還相においては「『註論』に述べられているから願文は出しません」というわけでしょう。何故でしょう。そして「『論の註』をひらくべし」と言うわけでしょう。

ここで「『註論』と『論の註』と言いついて違っているのはなぜか？」という問いが生まれてくる。このどちらも『浄土論註』の事ですが、「註論」と言った場合は「これは論である、菩薩の言葉である」という事を意味してくる。「論の註」とは凡夫が菩薩の『論』を頂戴し解釈した物という事になるわけです。とするならば、それを書いた曇鸞は菩薩で、それを親鸞（我々凡夫）が頂戴する、という意味を示しているのではないのでしょうか。つまり、22願還相回向の願は、今歩んでいる自分の現実にあるのだ、という事を示しているのではないのでしょうか。だから、ここでは書かないのだ、という事でしょうか。

それでは、(p 285)「『論註』に曰く」から見ていきたいしたいと思います。これは個人個人が自分の現実において読んでいただければと思います。それで、わたしにおいての注目する点を少し羅列しておきたいと思います。

- ① p 287 「それ非常の言は常人の耳に入らず。これをしからずと謂えり。またそれ宜しかるべきなり。」

ここは仏法不思議を述べた部分です。『大無量寿経』を案じて菩薩の事を考えると、十地というのは仮のものだ、浄土の教えはそんなものは必要でない、仏法不思議であるから、と述べられている。そのことを、好堅という樹と松という木を比べるとという譬えをもって、信じられないであろう、という。

それをまた「宜しかるべきなり」と言われる。これをどう読むか、です。

- ② p 290 「清浄句とは、いわく真実の智慧無為法身なり。」

これは広略相入の略の方、一法句のことですね。一法句は清浄句と言われ、それは何故清浄というのか、という問いを立て、「真実の智慧無為法身をもつてのゆえなり」と答えられ、ここから転写されていきます。

このことから何が言われているのかを考えると、一法句は念仏、その念仏とは法身、すなわち阿弥陀如来である。そしてこの阿弥陀如来（法身）によって三種の莊嚴功德が成就する、この成就するという事が清浄という言葉で器世間清浄と衆生世間清浄で言い表されていきます。

したがって莊嚴が成就するという事は清浄になるという事です。そして p 292 に「大乘正定聚にいりて畢竟じて清浄法身を得べし」と結ばれている。

- ③ p 295 「もし智慧と方便とに依らずは、菩薩の法則、成就せざることをしるべし。」

この菩薩の法則とは、智慧なく衆生のためとするときは墮顛倒、方便なく法性を求めれば、實際を証してそこのとどまる、これは七地沈空ということですね。

- ④ p 296 「教化地はすなわちこれ菩薩の自娯樂の地なり。」
- ⑤ p 297 「煩惱の林の中に回入して、神通に遊戯し、教化地に至る。」
- ⑥ p 298 「利他の正意」

この正意という「正」が気になりますね。私たち「利他」という事はどうに知っていると思っている。他人を救う・助けることだ、と思っている。でも、本当はそうじゃないんだ、と。知多の本当の意味を顕わしてくるのは還相回向なんだ、と言っているような気がします。そのヒントが④⑤の言葉ではないかと思います。そしてそれが「他利利他の深義」へと集約されていくと考えています。

課題20 「他利利他の深義」とは？

「他利利他」ということが何故『証巻』の結びに出てくるのか？ということですね。つまりこの文言が出てくるのは『行巻』（p 194）ですね。『証巻』には（直接的な意味では）出てきません。それなのに何故『証巻』で結ばれているのか。

これを考えますと、『行巻』で述べた「他利利他」が『証巻』にまで続いているという事を意味しているんだろうと思いますね。

『行巻』も表面的にしかみてこなかったのでもそこには触れてこなかったんですが、p 193 「他力というは」というところから（追釈要義と呼ばれている）還相の内容が述べられていきます。そして他利利他がなぜ言う事ができるかと言えば、18願・11願・22願の三願が的（ひと）しくこの義の意を証する〔三願的証という〕と述べられています。

この三願が何を証しているかと言えば、「速やかなることを得る」証であるというわけです。この「速やか」は、菩薩が一地一地上っていく事に対して、私たち浄土教の人が速やかに七地を超えることを示しているのではないかと思います。ということは、『行巻』から『証巻』までで二地から六地まで飛び越えている、という事を意味しているのではないかと、思うんですね。そういうことはどこで言えるか、と言えば、如来の加勸という事によって成り立つという事です。

そしてそのことは、七地を超えた還相に至って初めて他利利他が明らかになった、という事で『証巻』が結ばれているのではないのでしょうか。

我々の念仏生活というのは、如来に出会うという事にほかなりません。つまり如来に出会っていく生活を示唆しているのです。その如来に利されているという自覚が「他利」という事でありましょう。また「利他」は如来が他を利している、という如来との出会いを示すものであろうかと思うのです。